手紙（三十八）

私に邪魔と入れられて（偶〻の差）面ひが唯一
好の芋と呼んでいるだけのすにぢちてすつさが、
地で晩餐やら、れ、ランプ灯りやら、戸締りや
らで一切り、もしかうさが、吹抜り濟
と、やと毋行の陸うちまて、部屋の表四
五ヶ所信地としてゐると、徒地としてみちまた
地とけて心は中々忙しい。まさ立人夫婦ち

2

陸さんに聞くまゝ、帰る中ゝを一度見れば
さんゝ場所しといがゝミ手の口実はないが苦
心情況ゝとゝこゝろへ、樣仰仰ひる主閣一本
ゝとゝ言は確かゝ昔人ど。函館して左形一行
くかゝ、ゝ、嫁っとゝ仰やゝなゝ口我ゝゝ
ゝるゝゝと、ゝ幼の孫子が戦うりゝとゝ
かけて、カンッとゝへゝ、深れゝさんゝ飛ゝ
ゝど、海ゝが、ゝの弱い光ゝゝゝ、孫
子の入ゝゝて、雪れゝさんゝ物ゝ学ゝ

えもしられとりんえる。

一勉強をしても心おちと欲ばる。もちこたえんの物と同ふ内の頑ど。

[redacted]

してるるいといふのと同いて、ちゃ私はんてれくわ、[illegible]

ふたいるる些へらルしあど。わ、みよ

ミ

宝くじ流をとけやうとして、よ、

よ、と小さな珈琲をちる。私は弱んで行つ

と、力任せに陽をふりぬけき。もう彼之か

4

らぞくしさまはれしい。

傷の痕とらけなゝ

の数いてちゝ赤とツトを哀しと私いたゝ、

ほとゝ気の毒すか小供ふい。それさんに私

を さゝのさゝ、小供ふくて厭ゝ、私雪ゝ

かいさゝ数いてゝゝといふ。私は考へて雪

れの邪魔一行つて雪さんの元弟国とゝ

て数いとゝこれは私なゝ一生の出来ゝ

とと思ふ。

元ゝ来ゝと、雪さんが

東京朝日新聞原稿用紙

「貴方、御役人吹へられて？」

「私吹られなかつたわ、行り話のんざゝ風さかうと。」

「徴兵すら。」

「私は常々自由主義吹へさうどれど、大体んじと思をれるとおめめと思ふ先生吹へられずかつさと言つて嘘と吐いて、

と言つて笑いと。

「それから皆はさんら四るもお辛うるるか

と聞く。

「ぞうといわと、ぞ俺うてあ日由すらわねえといつて徴兵まる、皆はと乗て考えるで、四るると紛らるん

6

いや、芋が送る必とだろうて、をれからをれを
母のうと問く。私をれるろやおらすさん
と、佐こんがないから、問をれる佐る母のう
と話しをれるを、又おやまやがらさ。
が、おらわてかうを、笑ひてうはる
りゝ、でうをうんはをんで、おびかりおる涙
をする。私は居らかをふいかうちんやうる
ざうこと。佐こうが問ちんを紙
おらと紙、雪にうんもやを紙、負け問
えう。話は話らんこるびかりご。と、ねもり見さ

7

小説は人間は必ずしも、それを、好いぬいてゐるいの、お
ゆみの独さんうやさんお陽うたもこくとうて、
毎日うの昭日うの、八方ものはうの以と立足
さんと二正ゐべてて、つうのといふ波で、私
さんでにやあ白くも行ともないうれど、雪
ゆきんの波ばりうは好い。雪ゆきんを波とす
うゆきは絶えず雪ゆきの、青ゑるりおひび
ひらひらと動く、時て絡かもと絡はけうの
には絡ら絡ゆメリンスといふものう、赤
しい形の襦袢の袖口から白い腕ぶこい寒う

8

東京朝日新聞原稿用紙

さうで晩ゝ父えゝ、はゝ松と京子と仲宮す
ゝ、芳枝のぬぎすて、その振ッこに力と入れ
て、ねえ、お爺さん、さうさわねえと私の
方を向いてかう訪とかゝめる。私ゝ一も二もな
く宮ゝさんの方とおもゝと、宮ゝさんと海を
して、うそゝ、ゆ吹ゝ、とゝと松の方と向く。
私ゝ
ゝゝと笑ゝ中と加ゝ。私は高飛ゝ第ゝ
宮ゝさんの欲みゝかゝじりゝとゝゝてゝゝ。宮
ゝさんの方ゝ仰向くと、私ゝ仰向く。宮ん
さんゝ仰向くと、私ゝ仰向く。

9

　　
　　
　　

10

かゝ何しても流ちゃうぶっつりゆれさ。雪にさ
んぶ鉛つてるぶ、板ゴム踏らてるか。神宮天使
う夜上と主う脱けさのご。も、雪にさんぶ
とぶ気ひと徒る伸として、もう伊的とうう、
といか。私う徒仮てい早で早いと心も紫
ちゃと、板をルう八的さとうと云か。
坊角の新聞来うかうしゃ海れて雪にさんう本
大方五角さんの新聞としとわね元。も
う徒方一行つて板板ゴ勉強でもしゃう
と沈上つと。板板ゴこれと、流ぶとう

ないで、生てわつてゐる。松もおておくつ
私は名を話らないものを傍らうとが、ト足ら
と言はさんの死体回り照を入らさ。私は幸
此事を引抜へて急りて鼻くわのうとして、
家の回のえの春時を生やしたれさんを迎ひ
言はさんを抱えつとのぢらう、白い向い欲
う時中を後えさと、

「何れに、」

「いふ」

「いえ、ぜに、元本回と炒りて来らので

東京朝日新聞原稿用紙

「あ、さらどッぱ。多へ彼奴ド私ちは
て東かゝ」
と位い嘸と也してからうとする。
私を元の田と後る返して、
から好いですよ。
ふ家さうだ仕ちと。
あ、
ら
ば
ば
で
も好いですよ」
「
「
「
さ
ゝ
芸伝を
と
仕
こ
る
ん
の空
ゝ
ゝ
ゝ

13

しと。私は立て続けに五六人
の客を送り出した。そうして時計の
針を見ると、もう一時半である。
私はもう疲れてしまった。
にぎりめしを食べて、ムリして
寝ようとする。
と、時計が時を刻んで
ゆく。
時計を見ると、
疲れてしまった。
気がいらいらして
眠かれない。
ベッドの中へ入って、
ぐったりとなった。
ハンの方の
方へ

14

逆とりちがひて元本国と称らて
十一月九日の為とて迎へ出でたるに
やうしつがい、
豊立は如立へ来れるから、伴ひ変り迎び
て、
私とは一人ら迎ふ小さ子一寸
知らしてやいよいよ迎ふ
くなとの為へ来たと
次と呼れんとすら。
い白ご。
ね。
ね。
ら、一戸、ら迎ふ
ら。
ら。
ら。

わけ元る用ら脱わ
てすと。地では分海学
逆と捷くが、四紙中
ゆ運動するゆゆじ。わ
くと考えれ。思う思んで、もう淀とそはる
られない。わたしは行くか、そかも郎分を逃ます
ら、行方するかないで、彩は後の方針
と孔って、見仏わと云とす宮ムとんの郎
ゆと思いして てつこ